

島崎藤村研究

— 明治学院時代の藤村 —

門 福 一

(一) 藤村文学を支えているものは、いかなる環境におかれても、そこで、自己を埋没させてしまわずに、常に、自己を意識し、どうかして自分を生かしてゆきたい、という生き方の強靱な論理である。彼が、「自分のようなものでも、どうかして生きたい」とつぶやく

時、彼は、自己の文学者、芸術家としての宿命を強烈に意識していたはずだ。この強烈な自我意識が、恋愛をも、家庭をも踏み合にすることを躊躇させなかったにちがいない。

彼は、与えられた環境（それは、時には、必然的なものもないではないが、多くは、偶然的な環境に敏感に反応し、その環境）をも、自己を生かすための材料とする。というより偶然的な環境を、あたかも、必然的なものであるかのように意識することによって、その環境を踏み超えてゆくという生き方が濃厚で

ある。このような生き方を、個人主義というより、利己主義として扱えたのが芥川であったが、しかし、それゆえに、明治、大正、昭和の長きに涉って、文学界第一人者の地位を失わなかったのではなかったか。

藤村は、あくまで芸術家であり、それに、誠実に生きてきたまでである。しかも、直観に依る芸術家ではなく、経験と具体性に生きた芸術家である。形而上的な思索者では、けつしてなかった。

ところで、「どうかして生きたい」という論理の支柱となったものは、「沈黙」と「苦闘」と「精進」の時間ではなかったらうか。亀井勝一郎氏は、それを「藤村の時間」と名づけたが、たしかに、「藤村の時間」は藤村文学を考えるばあい、見のがしにはできないように思われる。

藤村文学は、電波の周期にも似ていると言

われる。それは、おそらく、『若菜集』『破戒』『新生』『夜明ヶ前』が、各時代の頂上に位する作品と賞讃され、しかも、ほぼ等間隔に、発表されていることを言っているのであろう。これらの作品の前後には、谷があったのであり、そこで、「藤村の時間」の蓄積が行なわれたことを言っているのであろう。そう考えると、いよいよ「藤村の時間」を測ってみることは、意味がありそうである。

そこで、私は、この小稿において、初期浪漫主義文学の頂点でもあり、日本の近代詩を真に近代詩の位置に止揚した『若菜集』の生成基盤になった「藤村の時間」を、精神的展開の中で、測ってみたい、と思うのである。

(二)

藤村が明治学院に入学したのは、明治二十九年九月、藤村十六歳の時である。明治学院はプロテスタント派のミッシェンスクールで彼は、英語を主要学科とする普通学部籍を置いた。藤村が明治学院に入学した、ということは、二つの出会いであり、もう一つは、キリスト教との出会いである。

ところで、二つの出会いが、どんな意味を

持つかを考える前に、明治学院入学が、はたして、藤村のみずから選んだものであったかを考えておこう。

藤村は、当時、吉村忠道氏宅に寄寓していた。吉村氏は、藤村を、ゆくゆくは、針問屋へ養子に世話するために、アメリカへ、西洋針の製造を見習はせにやろう、と考えていたようである。（『桜の実の熟する時』『新片町だより』）、アメリカへ行くためには、英語を身につけなければだめだ、ということで、吉村氏が、明治学院入学を勧めたのではないか、と考えられる。「自分は又少しも知らずに明治学院へ送られたのであった」という感想も、おそらく、そういう事情を物語っているのではないか、と思われる。つまり、藤村の明治学院入学は、主体性を持たなかった。言いかえるならば、内面的必然によつたものではなかった、と言うことができるのではないか。もっとも、藤村は、吉村氏の意図とは、反対に、「政治家になろうという考えを抱いた」野心深い少年であった、といっている。しかし、このことは、少しも、明治学院入学の動機が、主体性のあるものであった、ということにはならない。

偶然に与えられた環境、そこで、取つた態

度、それが、藤村の自我のめざめと深い係りを持つてくる。つまり、偶然を内面的必然に置き変えてゆくところに、自我の発見、自我追及の様相が、見出され、その過程において「おそき苦闘」と「沈黙」の時間が生まれてくるのである。

英語との出会いについては、この小稿では十分、意が尽されないので略すことにする。たゞ、英語を通じて、西洋文学への傾倒が始まったのであり、彼の西洋文学の傾倒が、この頃から、涵養されてゆくことを記しておこう。ところで、藤村が知らないうちに送られた明治学院のキリスト教思想とはどんなものであったか。それを、藤村は、どう受けとめていったか。そして、さらには、それが、どんな役割を果たしたか。

明治学院のプロテスタントイイズムは、敬虔で、厳肅な清教徒主義の雰囲気を持つていたと言われている。プロテスタントイイズムは、本来ヒューマニスティックな宗教思想である。カソリックのように、神の救いは、人類に対する慈善事業、それは教会に奉仕することによって得られるという、いわば、個性否定の精神ではなく、人類が、各々個性を伸ばしあい、労働することによって、人類が物質

的に繁榮すれば、神の救いがあるという個性尊重の自由な精神である。当時は、西洋から導入される思想は、あらゆるものが、啓蒙思想になりえた、という事情もあって、プロテスタントイイズムは、享樂的・社交的な雰囲気を感じ出したとも言われる。それが、「まるで、籠から飛び出した小鳥のように好き勝手にふるまうことができ」る自由な社交の雰囲気を生んだ一種の文明開化と受け取られたのである。このように、一方においては、清教徒的な敬虔主義が「世間に迂いということが恥辱ではなくて、反って手柄なんぞのように思わせる」隠微的な気分を引き出し、一方において、個性尊重の精神が「高い枝からでもながめたようにこの広々とした世界をながめた時は、何事も自分のしたいと思うことでしてできないことはない」と思われるほど、藤村の空想を刺激したようである。

しかし、三年生頃になって、藤村は、大きく、おそらく一八〇度の転回をやつてのけた。「けれども彼は目がさめた。かつて彼をしあわせにしたことはドン底のほうへ彼を突き落した。（中略）彼が言ったこと、したこと、考えたことはすべて後悔の種と変わった」（『桜の実の熟する時』）明るい男女交

際が自由にできる解放的な雰囲気浸っていたことが、「後悔の種」となるほどのこの交戦は、それでは、何を契機として行なわれたのであるか。

こゝで、再び、明治学院のプロテスタントイイズムを調べてみると、それが、キリスト教二元観の奇妙な調和の上に立っていることに気づく。一方で、清教徒的な敵愾い精神主義を指標としていながら、一方で、解放的な本能主義を認める、という奇妙な調和に。

藤村は、それまで、この奇妙な調和に安住していた自己が、単なる幻覚に過ぎないことを見ぬいたのではないか、そしてプロテスタントイイズムの、キリスト教二元観の奇妙な調和が、幻覚に過ぎないことを見ぬいたのには、おそらく、次のような理由があったであろう。その第一は、自己の内部に潜む醜悪な、嫌悪すべき本能が、現実深く根をおろし始めたこと。その第二は、第一の理由とは反対の極、つまり、日本の古典、ことに、芭蕉などを通じて、隠遁的な、枯れた世界への憧憬が、日増しに強められてきたこと、である。この二つの世界が、偽らざる現実として、自覚され始めた時、二つの世界は、容易に調和されそうもない矛盾と対立の様相を顯

示してきたのではないか。そして、この肉と靈の矛盾を、どうかして調和させようとするべく腕回している時間を、「沈黙」と「おぞき苦闘」の時間と名づけるのである。こうして、急に「沈黙」と「苦闘」を強いられた藤村は、幻想で美しく飾られたキリスト教の世界には無縁な人であることを感じ、文学の世界へ足を踏み入れることになるのである。もともと、藤村がキリスト教の籍を離れるのは、明治二十六年の一月のことであるが、しかし、それは、まったく形式的に過ぎなかったと思う。

ところで、肉と靈の調和の世界を文学に求めていこうとした藤村の苦闘は、どんなものであったか。

それは、この頃の読書傾向に、一番端的に表われているように思われる。芭蕉には、小さい頃から親しんでいたと、後の隨筆で語っているが、彼の理解した芭蕉とは、「一口に言えば尊い「老年」であった」(『芭蕉』)芭蕉を尊い「老年」と感じ、芭蕉の芸術を「抑制した芸術」と見る見方には、形而上的世界への憧憬が反映している。芭蕉を通じて、西行の世界へ導かれるのも、意識の連続であり、ダンテ・ワーズワース等の著作に親しむ

のも、その延長線上にあった、と考えられる。又、西鶴・近松などにも親しんだ、ということが『文学に志した頃』に記されているが、これも、芭蕉・西行などは、対照的な作家だけに興味をひく。さらには、シェクスピア・バーンズ等に近づくのも、無意識であったにせよ、藤村の形而下的世界への憧憬を物語っている、と言えるのではないか。こうしてみると、文学の世界でも又、肉と靈の矛盾に悩む藤村の姿は、痛々しいものがある。

(三)

しかし、とにかく、彼は、文学を志すにあたって、二元観の調和、という明確な命題を持ちえたのであり、この命題を見失わない以上、文学に対する執着は、いっそう強烈なものになってゆくはずだ。彼が、生涯、文学に誠実に生きた生き方の底には、二元観の統一という命題を解決する唯一の方法は、文学だという絶対的な信念があったのではないか。

そして、この肉と靈の調和・統一という命題こそは、彼が、キリスト教との接触を通して獲得したものであり、それが又、自己の生の自覚を促し、生の自覚は、発展的に、文学に生きるということで、自我の確立を促したことを考えれば、キリスト教との接触、もつ

と大まかに言えば、明治学院入学は、藤村にとって、きわめて重要な意味を持つと、言えるのではないか。重要な意味を持つと考えるのは、それが、あたかも、藤村の内面的必然であった、というような錯覚に、我々を陥入おとしこれるが、そうではなくて、まさしく、そこに

意志の力、強靱な生き方の論理が顕現されているからである。藤村にとって、春が確実に「ある」ということは、確実に冬が「ある」ということではなければならなかったのだ。